

## 第四十節の隠された歴史——その六

十一

Jeff Pippenger

2026-04-02

隠された歴史の研究に取りかかるにあたり、われわれは、現在、四十節における終わりの時から四十一節の日曜法に至る歴史と一致するものとして理解されている、預言の内的系統と外的系統の両方を考察する。その預言的歴史の内的系統は、黙示録第十一章十一節によって画されている。外的系統は、ダニエル書第十一章十一節によって画されている。ダニエル書十一章の外的系統——十一節——は2014年に歴史の中に到来し、黙示録十一章の内的系統——十一節——は2023年12月31日に歴史の中に到来した。外的系統は地の獣の共和党の角を表し、内的系統は地の獣のプロテスタントの角を表している。

### アメリカ合衆国

黙示録は、終わりの日における主要な一つの国家を、その主題として示している。その国家とは、全世界に教皇権の海の獣を拜ませる地の獣である。黙示録は、一つの主要な国家、一つの十か国の連合体、そして一つの偽の教会を示している。その国家とは、すなわち第十三章の地の獣であるアメリカ合衆国であり、偽の教会とは第十三章の海の獣であり、聖書にいう悪の十王連合体とは国際連合である。これら三つの勢力は、黙示録第十六章において竜、獣、そして偽預言者として表され、世界をハルマゲドンへと導く。

それらはそれぞれ、ダニエル書十一章四十節から四十五節において特定されている。ここでは、偽りの教会が四十五節において「海と美しい聖なる山との間」でその終わりを迎えるが、これは地理的に黙示録のハルマゲドンと一致する。四十節は、一七九八年、すなわち海の獣、すなわち偽りの教会が致命的な傷を受けた時点で始まり、この箇所は、その復活した海の獣、すなわち黙示録十七章の淫婦が二度目の死を遂げるところで終わっており、こうしてこの箇所は、それが始まったまさにその地点で終結する。黙示録とダニエル書の双方における主要な国家は、反逆の章である黙示録十三章の地の獣、すなわちアメリカ合衆国である。地の獣はまた、黙示録十六章における偽預言者でもあり、ダニエル書十一章四十節においては、それは戦車、船、および騎兵である。

### 半分だけの真理は、まったく真理ではない

終わりの時代において、ダニエル書と黙示録の双方の主題となっている国民はアメリカ合衆国であり、またダニエル書十一章は、その国民の最後の大統領を明確に特定することから始まっている。この真理は、ラオディキア的セブンスデー・アドベンチストが半ばの真理の背後に身を隠すことによって退けている、すでに確立された聖書的事実である。この主題に関して彼らが身を隠している半ばの真理とは、黙示録十三章の地の獣も、また第十六章の偽預言者もアメリカ合衆国であるという点では彼らも同意している、ということである。しかるに彼らは、ドナルド・トランプが終わりの時代における聖書預言の主要な主題の一つであることを認めようとしない。神は決して変わることはない。神

がエジプトと関わられたとき、ファラオは預言的歴史の主要な主題であった。次いでバビロンにおいては、ネブカドネザルとベルシャザルの名が記されている。キュロスの名も記され、ダレイオスの名も記されている。聖書は、地の獣の最後の支配者を明確に特定しており、それは何気ない言及ではない。アドベンチズムは、終末時代の預言においてアメリカ合衆国が何者であるかを知っている。だが神があらゆる預言的場面において、その国民とその指導者の双方に言及されること、そしてそれら過去のすべての聖なる歴史が終わりの時代を例証していることを見ることのできないのである。

## 最後の幻におけるラッパ

ドナルド・トランプは、ダニエルの最後の幻における最初の主題であり、それはダニエル書におけるすべての預言的幻の頂点であるのみならず、聖書全体におけるそれらの頂点でもある。

神の御言葉の中にある預言的歴史の最後の幻の主題は、ドナルド・トランプである。彼は、第四十節の隠された歴史における終末時代の外面的預言の足跡を識別する象徴である。彼はまた、十四万四千人の内的系統を識別し、かつ確立する連結点でもある。十四万四千人は、黙示録十三章の地の獣の上にあるプロテスタントの角であり、ドナルド・トランプは同じ獣の共和党の角を表している。その獣とはアメリカ合衆国憲法であり、それは当初、二つの角の間に分離を設けた立憲共和政体によって表されているが、最終的にはその角々を教皇制の海獣の像へと一つに結び合わせる。

ホワイト姉妹は、ダニエル書第三章の金の像を終末時代の日曜法と繰り返し結び付けている。では、ネブカドネザルはだれを表しているのか。アドベンチズムは、それが合衆国、すなわち黙示録十三章の地の獣であると教えるが、それは、シャデラク、メシャク、アベデネゴを火の中に投げ込んだのがバビロンであったと同定することに等しい。聖書が日曜法の時にその責任を負う者として示しているのはネブカドネザルである。では、間もなく到来する日曜法の時に統治している大統領でないとするれば、ネブカドネザルとはだれなのか。

## 三つ

ダニエルの最後の幻、すなわちヒデケル川の幻は、黙示録第十四章の三天使それぞれの特質に対応する三つの章に分けられている。その三つの章は第一、第二、第三の天使を表しているが、同時にまたダニエルの最後のメッセージをも表している。第一章における彼の最初のメッセージもまた、黙示録第十四章の三天使を表しており、こうしてアルファでありオメガである方の印が第一章とヒデケル川の幻の上に置かれている。

ダニエルの最後の幻は、ヘブライ語の「真理」という語の枠組みの上に置かれている。この語は、ヘブライ語アルファベットの第一、十三、そして最後の第二十二の文字によって構成されている。第十章は、ダニエルを預言の学徒として示しており、彼は第二十二日にラオデキヤ的状态からフィラデルフィヤ的状态へと変えられる。それによってダニエルは、第十二章に示されている、封印が解かれた知識の増大を理解する力を与えられる。この幻の最初と最後の章は、ダニエルを、真に預言を学ぶ者たちである十四万四千人の象徴として示している。

「人間の知的進歩がいかなるものであろうとも、より大いなる光を得るために、聖書を徹底的かつ継続的に探究する必要がないなどと、決して一瞬たりとも考えてはならない。われわれは、一人ひとりが預言の研究者となるよう召されている民である。」『証の書』第5巻、708頁。

第一章はヒデケル川の幻と同じ真理を明らかにしており、またヒデケル川の幻の第一章は、その第三章、すなわち最後の章と同じ真理を明らかにしている。ダニエル書にはアルファとオメガの刻印がある。というのは、第一章が永遠の福音の三段階の試みの過程を示しており、第十二章もまた同様だからである。さらに、ダニエルの最後の幻を構成する三つの章の中であって、第一章はアルファであり、第三章はオメガである。これは、何を食べるべきかに関するダニエルの最初の試みと、三年の後にネブカデネザルによって審査された彼の第三にして最後の試みとに一致している。ダニエル書第一章のアルファの試みは、バビロンの食物を食べるか菜食を食べるかによって表される、聖書研究の方法論をめぐりものであった。

ダニエルが「一つ一つ積み上げる」方法論に忠実であったことにより、彼は「王が彼らに尋ねた知恵と悟りに関するすべての事柄について、その全領土にいたすべての呪法師と星占い師よりも十倍すぐれていることを見いだされた」。オメガである第十二章においては、預言の御言葉が封印を解かれるとき、知恵に関するすべての事柄を理解する賢い者たちが増し加えられるのである。第十二章は第一章に対するオメガであり、またヒデケル川の幻のアルファである第十章に対するオメガでもある。そのアルファである第十章において、ダニエルは、第十二章において賢い者たちが知的経験において定着することに対応して、霊的経験において定着する。第一章は、預言の学徒が封印されるために、霊的にも知的にも真理のうちに定着することを可能にするのは、聖書研究の方法論であることを強調している。

終わりの日における預言の真の学徒を表すものとして、ダニエルと三人の傑出した者たちは、1989年の終わりの時に封印が解かれて増し加わる知識を理解するだけでなく、9・11における知識の増加をも理解する賢い者たちである。究極的には、彼らは2023年12月31日における、封印の解かれた知識の増加を理解するのである。

神の預言的光を追い求めることにおいて、彼らは十四万四千人のラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチスト運動から、十四万四千人のフィラデルフィヤ的運動へと変えられる。その変化が生じるとき、彼らは鏡の幻から逃れ去った者たちから分離される。

## 人間の反逆のメッセージ

第十章と第十二章は十四万四千人に言及している。なぜなら、それらは真理の枠組みにおける第一および第三の段階だからである。第十章の鏡の幻の内的経験によって力を与えられ、さらにダニエル十二章の封印の解かれた理解によって啓発されたのち、彼らは人間の反逆のメッセージを宣べ伝えるのである。人間の反逆のメッセージはダニエル書と黙示録によって表されており、反逆のメッセージは、ダニエル書に示された聖書預言の諸王国という預言的枠組みの中に置かれている。ダニエル書のうちにある人間の反逆の証しの預言的象徴は、第十一章において完全に表現されている。第十一章は、バビロンの終焉とメディア・ペルシアの始まりを起点とする歴史である。したがって、それはバビロンの致

命的な傷をもって始まっており、それは1798年における教皇制の致命的な傷を予表している。教皇制の致命的な傷が、まもなく到来する日曜法において癒やされる時、彼女は竜と獣と偽預言者の三重の連合の頭となる。そのとき彼女は黙示録第十七章において獣に乗る女であり、その女の額には「大いなるバビロン」と記されている。まもなく到来する日曜法において、バビロンと教皇制の双方の致命的な傷は癒やされるのである。

バビロンの時代から世の終わりに至るまでに表される人類の反逆は、ダニエル書の枠組みであり、第十一章は、その終末の時代におけるその反逆を記録する外的な預言的メッセージである。第十一章に見いだされるその反逆の証しは、同章の最後の六節と一致し、かつその中に含まれている。最後の六節は人類の反逆のメッセージであり、そしてその最後の六節は、第四十節の隠された歴史と一致し、かつその中に表されている。このようにして、ダニエル書は一章にまで集約され、その一章はさらにその章の六節にまで集約され、さらにまたその六節は、一節の後半にある隠された歴史にまで集約される。

第十一章は、ヘブライ語アルファベットの最初の文字と最後の文字に先行されかつ後続される第十三の文字を表しており、最初と最後は常に同一である。第一章は、鏡を見る幻において賢い者が愚かな者から分けられることを示し、最後の章は、開封において賢い者が愚かな者から分けられることを示している。靈感は、十四万四千人の印することが、「知的にも霊的にも真理のうちに定着すること」であると告げている。第十章は十四万四千人への印を霊的側面から示し、第十二章はその知的側面を示している。第十章は三度の接触と三度の天の存在との相互作用を示している。第十二章は、知的な預言的真理の増加によって成し遂げられる賢い者たちの三段階の清めを、「清められ、白くされ、試される」として示している。ちょうど第十章が、三度の接触と三度の天的遭遇という二つの三の象徴を有しているように、第十二章もまた、三段階の試験の過程を有し、さらに三つの時の預言を有している。

第十章における三つの天的出会いは真理の刻印を帯びている。というのも、ダニエルと最初および最後に関わった天的存在は御使いガブリエルであり、中間の存在はミカエルであったからである。三人の御使いであるが、第二の段階における御使いはキリストであった。これら三度の接触は、ダニエルに対する漸進的な三段階の力づけを表している。この箇所において、ダニエルは「鏡を見るような幻」を三度言い表しており、そうすることによって、第十章にある *mareh* の幻に関する七つの言及の中に、その三つの「鏡を見るような幻」を位置づけている。ヘブライ語 *mareh* は二度「appearance」と訳され、また二度「vision」と訳され、さらに他の三箇所でも「vision」と訳されている。この「他の三箇所」は *mareh* ではなく、その女性形である *marah* である。第十章には、漸進的な力づけとしての三度の接触、真理の刻印を帯びた三つの天的出会い、そしてキリストの現れに関する七つの言及の一部を成す三つの「鏡を見るような幻」がある。

## 外観

「*mareh*」が「appearance」と訳されている二箇所は、それが「vision」と訳されている二箇所と一致している。これらを合わせると、キリストが預言の歴史において道しるべとして現れる象徴であることが示される。黙示録第十章において、一人の御使いが降って来て、一方の足を地の上に、他方を海の上に置く。ホワイト姉妹は、その御使いは「イエス

・キリストにほかならないお方」であったと告げている。黙示録第十章の御使いは、預言の歴史におけるキリストの「appearance」である。彼はダニエル第八章十三節においてパルモニとして現れ、また黙示録第五章以降においてはユダ族の獅子として現れる。ダニエルは、キリストがどこへ行かれようとも、その預言的出現に従う終わりの日の人々を表している。もし彼らが忠実にそうするなら、不忠実な者たちが逃げ去るところの、looking glassの幻へと導かれるのである。

第十二章における、封印が解かれたときに増し加わる知識の理解に基づく三段階の清めには、三つの「時の預言」が伴っており、それらは三つの節のそれぞれについて三つの異なる成就を表している。第七節の千二百六十年、第十一節の千二百九十年、および第十二節の千三百三十五年は、それぞれ時の預言を含む三つの節を示しており、その預言は歴史の中で成就し、その後、ミラー派によって、彼らの宣べ伝えた使命の歴史的確認として認識された。その節における予告、歴史的成就、そしてその歴史に対するミラー派の適用は、これら三つの預言の終末時代における成就を証している。しかし、ミラー派による時の適用はもはや有効ではないので、それらの節における時の言及は、時としてではなく、象徴として適用されなければならない。その象徴性は、その節、その節の歴史における成就、そしてミラー派によるその使命の提示を適用することによって、それらの節の中に確立される。

第十一章における人類の反逆の年代記は、同盟、条約、契約によって織り成されている。第十一章の歴史の中に示されている人間の契約は、神の契約と対比されている。

「この地上の歴史の終末の時代において、神の戒めを守る民との神の契約は、更新されるのである。」『Review and Herald』1914年2月26日。

ローマはこの幻全体を確立しており、そして教皇制ローマが第十一章において最初に言及されるとき、彼女は「聖なる契約を捨てる者たち」として示されている。ダニエル書第十一章における内的系統、すなわち第四十節の隠された歴史の中にある内的系統もまた、終わりの日に神と契約に入る者たちを表しており、これに対して外的系統は、まさにその契約を捨てる者たちを示している。終わりの日における知識の増加によって益を受けることのない階級を例示するにあたり、彼らの外的歴史は、破られた人間の条約という預言的な糸の上に織り込まれている。

十四万四千人の内的な系統の中には、神と終末時代の残りの民との契約関係を示す複数の象徴と例証が織り込まれている。数「十一」の象徴もそれらの真理の一つであり、さらに第十一章第十一節が終わりの日の外的および内的な幻を特定しているという事実は、イザヤが第十一章第十一節において、神の終末時代の契約の民の目的と働きを明らかにしていることによって強調されている。

その日、主は再び、第二度その御手を伸ばして、その民の残りの者、すなわち、アッシリア、エジプト、パテロス、クシュ、エラム、シナル、ハマテ、および海の島々から残されている者を贖い出されるであろう。イザヤ書 11:11

離散

終わりの日において、神の残りの民は二度散らされており、集められることを必要とするであろう。ダニエル書十二章七節は、終わりの日における神の民の散らしを示しており、それゆえ千二百六十日は散らしの象徴として表されている。

私は、亜麻布をまとい、川の水の上にいるその人が、右手と左手を天に向けて上げ、とこしえに生きる方をさして誓い、「それは一時と二時と半時である」と言うのを聞いた。そして、彼が聖なる民の力を打ち砕き散らすことを成し遂げるとき、これらすべてのことは成就するのである。ダニエル 12:7.

二人の証人は、自らの証言を終えた後、黙示録第十一章において散らされた。

そして、彼らはその証しを終えるとき、底知れぬ所から上って来る獣が彼らに戦いを挑み、彼らに打ち勝ち、彼らを殺す。彼らの死体は、大いなる都の大路にさらされる。その都は、霊的にはソドムおよびエジプトと呼ばれ、また、そこで私たちの主も十字架につけられたのである。もろもろの民、部族、国語、国民に属する者たちは、三日半の間、彼らの死体を見、それを墓に葬ることを許さない。地に住む者たちは彼らのことで喜び、楽しみ合い、互いに贈り物を交わす。これら二人の預言者が、地に住む者たちを苦しめたからである。黙示録 11:7-10

次の節、すなわち第十一節において、二人の証人は、ソドムとエジプトの大路におけるその死から復活する。同じその死は、エゼキエルによって、散らされた死んだ枯れた骨の谷として描かれている。二人の証人は、2020年に殺された共和主義とプロテスタントの二つの角を表している。プロテスタントの角は、2020年7月18日のその偽りの予言において死に、共和主義の角は、2020年の盗まれた選挙において死んだ。イザヤは、証人たちが復活するとき、彼がそれを二度目の集めであると示しているが、そのときそれらの証人たちは、第十一時の労働者たちを集める旗となると明らかにしている。

その日、エッセイの根が立って、もろもろの民の旗となり、国々はこれに求めて集い、その憩いの場は栄光に満ちる。その日、主は再び御手を伸ばし、二度目に、その民の残りの者を取り戻される。すなわち、アッシリア、エジプト、パテロス、クシュ、エラム、シナル、ハマテ、および海の島々から残された者を、主は国々のために旗を掲げ、イスラエルの追いやられた者たちを集め、ユダの散らされた者たちを地の四方から寄せ集められる。イザヤ 11:10-12.

主が再び御手を伸べて集められるとき、主は「イスラエルの追放された者たち」を集められる。「イスラエルの追放された者たち」は異邦人への旗印となるのであり、このゆえに、彼らは集められる前に、まず追い出されていなければならない。彼らはエゼキエルの死骨の谷へ追い出され、いったん殺されると、わたしたちの主もまた十字架につけられたその大路に横たわっていたが、その間、他の一群は喜んでいた。

主の言葉におののく者たちよ、主の言葉を聞け。あなたがたを憎み、わたしの名のゆえにあなたがたを追い出したあなたがたの兄弟たちは、「主があがめられるように」と言った。だが、主はあなたがたの喜びのために現れ、彼らは恥を見るであろう。イザヤ書 66:5

神の御言葉におののく者たちは、彼らを憎んだその兄弟たちによって追い出される。エレミヤは、その旗印を憎んだ兄弟たちに何が起こるかを明らかにしている。

それゆえ、主はこう言われる。見よ、わたしは彼らの上に災いをもたらす。彼らはそれを免れることができない。彼らがわたしに向かって叫んでも、わたしは彼らに聞き従わない。エレミヤ 11:11

第十一節の文脈は神の契約であり、またすべての預言者は終わりの日について語っているので、ここで論じられている契約とは、十四万四千人との契約の更新である。

主からエレミヤに臨んだ言葉はこうである。すなわち、「この契約の言葉を聞き、ユダの人々とエルサレムの住民に語れ。彼らに言え。イスラエルの神、主はこう仰せられる。この契約の言葉に聞き従わない者はのろわれよ。この契約は、わたしがあなたがたの先祖をエジプトの地、鉄の炉の中から導き出した日に、彼らに命じて言ったものである。『わたしの声に従い、わたしがあなたがたに命じるすべてのことを行え。そうすれば、あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる。こうして、わたしがあなたがたの先祖に誓った誓い、すなわち乳と蜜の流れる地を彼らに与えるということ、今日のこの日のように成就するためである。』」そこで私は答えて言った。「主よ、そのとおりです。」

主はわたしに言われた。「ユダの町々とエルサレムの街路で、これらすべてのことばを宣べ伝えて言え。『この契約のことばを聞き、これを行え。わたしは、あなたがたの先祖をエジプトの地から導き上った日から今日に至るまで、早くから起きて切に戒めつつ、『わたしの声に従え』』と言い続けた。しかし彼らは従わず、その耳を傾けず、おのおのその悪い心のかたくなさに従って歩んだ。それゆえ、わたしはこの契約のすべてのことば、すなわち彼らに行うよう命じたのに、彼らが行わなかったそのことばを、彼らの上にもたらす。』」

主は私に言われた。「ユダの人々の間に、またエルサレムの住民の間に、陰謀が見いだされた。彼らは、わたしの言葉に聞き従うことを拒んだ先祖たちの咎に立ち返り、他の神々に従ってこれに仕えた。イスラエルの家とユダの家は、わたしが彼らの先祖たちと結んだ契約を破った。それゆえ、主はこう言われる。見よ、わたしは彼らの上に、彼らが逃れることのできない災いをもたらす。彼らがわたしに叫び求めても、わたしは彼らに聞こうとはしない。」エレミヤ 11:1-11。

エレミヤが明示しているラオディキア的セブンスデー・アドベンチズムに対する裁きという主題は、エゼキエル書第十一章十一節においてエゼキエルによって繰り返されている。

この都はあなたがたの大鍋とはならず、あなたがたもその中の肉とはならない。わたしはイスラエルの国境であなたがたをさばく。エゼキエル 11:11。

靈感は、エゼキエル書第九章の印が、黙示録第七章の十四万四千人に施される印そのものであることを、直接に明示している。第十一章十一節は、エゼキエルによる、第七日再臨教会に対する裁きについての継続した叙述の単なる延長であり、この教会を、ホワイト姉妹はエゼキエル書第九章のエルサレムであると特定している。印を受けなかった者たちは、第九章から第十一章にわたる幻の中で、裁かれ、滅ぼされるのである。

エゼキエルにおける9/11の幻は、不忠実な者たちが裁きを受けるためにエルサレムの外へ連れ出されることを示しており、それによって、黙示録に描かれている終末の教会であると告白する者たちの最終的分離を明らかにしている。「十一、十一」という象徴は、十四万四千人が神と結ぶ契約の象徴である。これらの数字を加えると二十二となるが、これは二百二十の十分の一であり、神性と人性の結合を表す象徴の一つである。

紀元前677年から457年までの二百二十年は、ダニエルの二千三百日の預言と、モーセの七つの時の預言とを結びつけている。この二百二十年については、それら二つの預言が1844年に共に到来したときに始まった贖罪の働きの象徴として、多くのことを見いだすことができる。二百二十の十分の一である二十二という数が、十一という数の場合と同様に、何を象徴的に表しているかについても、多くのことを提示することができる。ここで私が明らかにしたいのは、十一と二十二との関係である。

これらの考察は、次の記事で引き続き扱うことにする。